

高橋勇吉の 天文堀

昭和五十八年二月五日号

語ってくれた人

勇吉の孫にあたる高橋しのさん（大野町）

私財を投げうって

沼地を開発

昔、沼川から浮島にかけての一带は沼地でした。ひとたび大雨が降ると、田は湖のようになり、附近の人々は大変悩まされました。大野新田に住む高橋勇吉は、この沼地に天文堀もんぼりという排水路を造ろう——と考えたのです。



高橋勇吉の碑

大雨のたびに飢饉

牢屋に入れられ許可が

江戸時代も終わりがころ、天保七年（一八三六年）全国に大飢饉が起りました。

元吉原でも秋の大雨で大野・松・田中の三新田の稲は全滅。食へ物もなく死人も出たほどです。

この時、勇吉三十二歳。三新田に排水堀を造ることを考え、村人や役人に相談しましたが、相手にされませんでした。勇吉は、ひまを作つては土手にのぼり、三新田をながめ排水堀の方法を、夜ごと曰ごと考えたのです。村人の中には、勇吉をきちがい扱いする人もいました。

九年の歳月がたち、また大飢饉。勇吉は江戸に向かい、工事の願いを直接奉行所に出そうとしたところ、役人に取りおさえられ、牢屋に入れられてしまつたのです。当時、村人が奉行所に直接願い出るとは禁止されていきました。何回となく取調べられた結果、やつと勇吉の考えがわかつて、工事の許可が出ました。

勇吉は、自分の田や畑、財産をほとんど売払い、排水堀の資金に充て、嘉永五年（一八一三年）三新田に排水堀を完成させます。勇吉が三新田に排水堀を造ろうと考えた時分から実に十五年の歳月がかつたのです。人々は、この堀を天文堀と名付けました。